

恩師沙孟海先生筆《遯録倪會鼎手跋一段》

河内 利治（君平）

Cherish the Memory of Great Teacher , Sha Menghai

Kawachi Toshiharu

1, 序

筆者は1981年9月から1983年8月まで、日本文部省留学生試験に合格し、浙江美術学院国画系書法篆刻班に、中国政府奨学金普通進修生として留学した。

留学期間中の指導教授が、沙孟海先生、劉江先生、王伯敏先生、章祖安先生であり、ちょうど研究生を修了したばかりの朱関田、王冬齡、邱振中、祝遂之、陳振濂の五氏からも様々な形で指導を賜り、種々の形で西泠印社の活動に参加することができた。帰国後も「西泠印社80周年」(注1)と「西泠印社90周年」(注2)の記念大会や、浙江省博物館文瀾閣で開催された「日本雪心会書法展覧」(注3)などの交流にも参加してきた。

このたび、「西泠印社百年社慶」という百周年の節目を迎えるに当たり、「百年名社・千秋印学国際印学研討会」が開催される。筆者は「西泠印社研究—対歴任社長の研究」という題目において、沙孟海先生から賜った学恩を回想し、奉詒された墨跡《遯録倪會鼎手跋一段》について中国語で述べた。ここに日本語版を収録することにする。

2, 沙孟海先生の〈書法史論〉と〈古文字学〉の授業

沙孟海先生から〈書法史論〉と〈古文字学〉を学んだ。毎週水曜日に、沙孟海先生のご自宅に伺い、午前中二時間の講義を受講した。一年目は、中野遵さんと二人で授業を受け、後期からは市川英子女史も一緒に受講した。二年目は、沙孟海先生が体調を崩されたため、休講もあったが、先生は最後まで授業を行って下さった。

沙孟海先生の留学生に対する講義を一番長く受講したのは、恐らく筆者であろう。よって、以下に講義ノートをもとに、受講内容の一覧を紹介しておきたい。

通算45回の講義題目を列記すると次のようになる。

〈書法史論〉01回～38回

01	1981年9月30日	自己紹介、学書方法、西泠印社
02	1981年10月7日	商代と西周の書
03	1981年10月14日	東周の書
04	1981年10月21日	石鼓文、古璽
05	1981年11月4日	石鼓文拓本、碑版の書手と刻手
06	1981年11月11日	隋代の四種の楷書、書写時の注意（注4）
07	1981年12月2日	秦代の書と秦書八体
08	1981年12月16日	西漢の書
09	1981年12月23日	東漢の書、武威漢簡
10	1981年12月30日	説文解字序の解釈
11	1982年1月13日	三国曹魏の書
12	1982年2月10日	三国呉蜀の書
13	1982年2月17日	黄士陵の印章
14	1982年2月24日	西晋の書
15	1982年3月3日	東晋の書
16	1982年3月31日	南北朝の書、北魏体
17	1982年4月7日	南北朝の碑と書
18	1982年5月12日	南北朝の新出土文物
19	1982年5月19日	隋代の書
20	1982年5月26日	唐代初期の書、大篆の学習方法
21	1982年6月2日	唐代中期・晩期の書
22	1982年6月9日	唐代の書の特色、日中書法交流
23	1982年6月16日	唐代の草書・隸書・篆書
24	1982年9月8日	学書方法、王羲之、宋元の書
25	1982年9月15日	五代の書
26	1982年10月6日	北宋三大家の書
27	1982年10月13日	北宋の篆隸書
28	1982年10月20日	南宋の書
29	1982年10月27日	元代の書
30	1982年11月3日	元末明初の書
31	1982年11月10日	明代早期・中期の書
32	1982年11月24日	小中学生書法教育の問題
33	1982年12月1日	明代晩期の書
34	1982年12月8日	清代前期の書

- 35 1982年12月15日 清代後期の書
- 36 1982年12月22日 清代の篆隸書、石碑の刻手問題
- 37 1983年1月5日 古代書法理論、筆法
- 38 1983年1月12日 清代の楷行書家
- 〈古文字学〉39回～45回
- 39 1983年1月19日 文字学の基礎と説文解字
- 40 1983年1月26日 説文学
- 41 1983年4月25日 六書〔指事・象形・形声〕
- 42 1983年4月27日 六書〔会意・仮借・転注〕
- 43 1983年6月8日 古文字研究の歴史
- 44 1983年6月15日 (ノート紛失)
- 45 1983年6月22日 文字の簡略化、秦書八体

授業を通じて忘れられないことが二つある。一つは、冬の先生のお宅の寒さである。決して立派とは言えないお宅は、冬場非常に寒かった。外気よりも、お宅の中の方が冷えるのである。先生は練炭を焼いて部屋を温めて筆者を待っていて下さった。それでも、部屋に入ると吐く息が白く見えるほどであった。先生が講義をされ、筆者はそれを聞き取り、ノートに書くのだが、指先がかじかんで震え、まともに字がかけない。息を手には吐きかけ、指先を温めることを何度も繰り返した。先生はお寒くなかったのだろうか？厚手のズボン下を二枚重ね、その上からズボンを穿いていても、足の骨が痛いほど寒かった。冬の杭州は厳寒であると思った。

二つ目は、何よりも授業を大切にされたことである。二時間ばかりの授業中に、ひっきりなしにお客さんが来訪する。先生に揮毫を求める客人が多かったが、授業中であると、遠来の客であろうと、偉い方であろうとすべて待たせておられた。授業終了後、何度お客さんと顔をあわせたことか。また、後述するように、病気で入院されたおり、お見舞いに行くと、退院したら補講するとまで言われたことである。

筆者は、授業の内容を復習するため、テープに録音して持ち帰り、再度書き取るようにしたが、筆者の中国語のレベルでは、なかなか聞き取れなかった。すべての授業を録音してあるので、なんとか、機会を見つけてテープおこしをしなければならないと思っている。

3, 宿題

講義とは別に、沙孟海先生から毎週課せられた宿題があった。それは文字学の勉強である。具体的には、唐詩三百首の七言絶句から始めて、『説文解字』（中華書局1979年天津第5次印刷本）の一行一篆本で調べ、鉛筆でノートに小篆体を用いて書き、先生に添削して頂くという内容である。唐

詩のほか、詩経国風、陶淵明「桃花源記」や韓愈「石鼓歌」などの長篇にも挑戦し、すべて先生に一字一字確認して頂き、誤字は万年筆で訂正して頂いた。このノートは筆者の宝物になっている。

唐詩一首を小篆で書き始めた頃、鉛筆で書き終えた後にたまには毛筆で書いてみたいと思い、書き上げてみた。ある授業の時、先生にノートの小篆体を見て頂いてから、書法作品をもお見せした。すると先生から「没有修養的人，不要写字！」との指導を受けた。先ずは、しっかりと基礎力を養う段階にある筆者が、毛筆で面白半分に書いてはいけないという意味で戒められたものである、そんなふうに先生のお言葉を受け止めた。この言葉は、今も私の教訓になっており、書法は決してそんなに簡単に身につけられるものではない、地道に積み重ねていくものであると考える土台になっている。

恩師の今井凌雪先生も「基本功」という言葉を使われるが、沙孟海先生と同じ意味であると考え

る。

この言葉がきっかけになって、筆者は帰国してから、筑波大学書専攻を卒業し、修士課程は書専攻に進んだが、博士課程は中国文学専攻に進んだ。書法を真剣に研究するためには、中国学の「修養」が不可欠と考えたからである。書法は中国文化の真髄であり、真に究めるためには中国古典文学、哲学、史学をはじめ多くの学問を身につけなければならない。現在もまだまだ「修養」が足りず、さらに研鑽を積み重ねなければならないと反省している。

4、黄道周墨跡との出会い

沙孟海先生は、浙江省博物館の倉庫において、館蔵書法作品を鑑賞し学習する授業を設けてくださった。その時、筆者の目に焼きついたのは黄道周の墨跡2点である。

黄道周については勉強不足で、知識が皆無の状態であったが、迫力ある行草書《五律詩翰軸》と、端正な楷書《詩翰冊》に見入ってしまった。

そこで、沙孟海先生に、「黄道周を研究したい」と申し上げたところ、先生も黄道周がお好きだったようで、「好！ 好！」とおっしゃって、許可してくださった。それから、浙江省博物館に出かけては、『黄漳浦集』五十巻の中から、書法に関する文章を抄録し、整理、考察を加えて、最後に「黄道周的書法観」と題する一文にまとめて、浙江美术学院に提出した。提出後、沙孟海先生が一つ一つ疑問点を書き出して、書き直すようにとの支持を頂戴した。帰国後、日本語に訳す中で、誤りを訂正し、筑波大学卒業論文「黄道周研究序説」として提出した。爾来、今日まで研究を続けている。

もし沙孟海先生の指導を受けなかったら、そしてもし浙江省博物館で黄道周の墨跡を目の当たりにすることが無かったなら、おそらく黄道周を長期間研究し続けることも無かったであろう。そう考えると、非常に不思議な縁を感じる。

5、沙孟海筆《遼録倪會鼎手跋一段》

帰国を目前に控えたある日、沙孟海先生から直筆作品（図版1～4参照）を頂戴した。以下にその全文を抄録する。

黄夫子嘗與先文正論書法曰、「字以適媚為宗，加以渾深，不墜佻靡，便足上流。衛夫人稱右軍書，惟云『洞精筆勢，適媚逼人』而已。虞、褚而下，筆意偏往。凡人才姿不逮，輒詆前人為軟美，可歎也。」繇此觀之書法，自以適媚兩字為斷然。又言，「分舉已難，況乎兼擅。」蓋適可學至，媚自姿生。姿授于天，無法趨步。得一取霸傑者，弗貴也。今從最箸者權衡，前為鍾太傅、後為趙松雪，位置夫子角立其間，兄太傅而弟松雪，定不誣爾。

黃石齋壬申元日詩墨迹，寫似倪鴻寶者。倪氏子孫珍藏三百年，今歸浙江省博物館。有鴻寶子會鼎手跋，遼録一段，奉詒河内利治同学。沙孟海年八十四。癸未盛夏。〔沙文若璽〕白文

（黄夫子、嘗て先の文正と書法を論じて曰く、「字は適媚を以て宗と為す，加うるに渾深を以てすれば，佻靡に墜ちず，便ち上流足る。衛夫人、右軍の書を稱えて，惟だ『洞精筆勢，適媚人に逼る』と云うのみ。虞、褚より而下，筆意偏往せり。凡そ人の才姿逮ばざるに，輒ち前人の軟美為たるを詆るは，歎くべきなり。」と。此れ繇之を書法に觀るに，自ら適媚の兩字を以て斷然と為す。又言う，「分舉すること已に難きに，況んや兼擅するをや。」と。蓋し適は學び至るべきも，媚は自ら姿生ず。姿は天より授かり，趨歩する法無し。一の霸傑に取る者を得るは，貴きに弗ざるなり。今、最も箸われし者從り權衡するに，前は鍾太傅為り、後は趙松雪なすり，夫子に位置し其の間に角立し，太傅を兄として松雪を弟とするは，定ず誣せざるのみ。

黃石齋の壬申元日詩の墨迹，寫きて倪鴻寶に似ず者なり。倪氏の子孫珍藏すること三百年，今浙江省博物館に歸す。鴻寶の子の會鼎の手跋有り，一段を遼録し，河内利治同学に奉詒す。沙孟海年八十四。癸未盛夏。〔沙文若璽〕白文）

冒頭の「黄夫子嘗與先文正論書法曰……可歎也。」は、若干の文字の異同および省略があるが、『黃漳浦集』卷十九「与倪鴻寶論書法凡三則」第一則に見える言葉である。また最後の段落の「黃石齋壬申元日詩墨迹」は、上海人民美術出版社『芸苑掇英』第十八期（1982年10月、注5）に掲載される楷書《詩翰冊》であり、『書法叢刊』第二十五期にも、倪鴻寶（元璐）の題字「瘦雲肥雨」四字に続いて、《倪元璐黃道周書翰合冊》（全）として収録されている。『書法叢刊』には、沙孟海先生の文章《倪元璐黃道周書翰合冊》も掲載されており、下線部は先生の引用文にも見える言葉である（注6）。

この沙孟海筆《遼録倪會鼎手跋一段》は、筆者が浙江省博物館蔵の黃道周墨跡を見てから研究を始めたことを、沙孟海先生が奨励して下さった証の墨宝である、と考えている。

6、結び——沙孟海先生の学恩

1982年5月2日付「浙江日報」第四版に、記者胡霸氏の筆者訪問記録「外国留學生在中國——訪日本留學生河内利治」が掲載されている。その中に、筆者が記者に語った言葉が引用されており、沙孟海先生から受けた学恩を如実に物語るので、少し長いが再録しておきたい。

“誠然、最使我感動的還是沙孟海先生。”河内利治充滿感情地說。他告訴我，沙老的書法在日本也頗有地位，日本許多老書法家充分尊敬沙老，他能在沙老的指導下學習書法，感到很榮幸。他贊揚沙老的誨人不倦精神。沙老不大会講普通話，上課時一口杭州話，為了讓外國留學生能聽懂自己的講課，沙老不顧年老體衰，特意增加板書。有時，沙老把同學們請到他的家中，拿出自己的書法作品讓同學們揣摩，并當場揮毫示範。最使河内利治感動的，是沙老在病中還惦記着他的學生。河内利治說：“前不久，沙老因病住院。我与另一位日本留學生去醫院探望。沙老一見到我們就說：‘我已拉下了几次課，很抱歉。待我出院後，我想除了按計畫要上的課外，再增加几次課，把拉下的課補上去。’當時我感動得說不出話來。在我們日本，象沙老這樣有名的教授，主要精力都放在自己的科研項目上，哪里能像沙老這樣，心裏時刻想到學生。”

（「本当に、もっとも私を感動させたのはやはり沙孟海先生です」と、河内利治は情感をこめて語った。彼は私に、沙老の書は日本でも非常に有名で、日本の多くの書家が尊敬しており、沙老の指導のもとで書法を勉強できることは、とっても光栄なことなのです、と語ってくれた。彼は沙老の、辛抱強く人を教え導く精神を褒め称える。沙老は普通話（中国語の標準語）があまり話せない。授業は杭州なまりで行われ、外国人留學生が自分の授業内容が聞き取れるようにと、ご高齢を省みず、特別に黒板を使用された。時には、學生を自宅へ呼び、自分の書法作品を見せて鑑賞に供したり、目の前で席上揮毫をしてみせたという。河内利治をもっとも感動させたのは、沙老が病気でありながら學生のことを気に懸けてくれたことである。河内利治が言うに、「先ごろ、沙老は病気で入院されていた。私はもう一人の日本人留學生と一緒にお見舞いに行った。沙老は我々を見ると直ぐさま、『数回授業を休んで申し訳ない。退院したら、予定している授業以外に、数回授業を行い、休んだ分を補いたい。』とおっしゃった。その時、私は感動のあまり言葉が出なかった。日本では、沙老のように有名な教授は、自分の研究に主要な精力を注いでおり、沙老みたいに片時も學生のことを忘れないということはありません。」とのことである。）

先生を病院にお見舞いした時のことは、今も脳裏に焼きついている。沙孟海先生の學生指導の精神は、何とか受け継いで行きたいと心がけているつもりである。

その病室を再度尋ねたことがある。朱関田先生に伴われ、帰国の挨拶をするためであった。病室にお邪魔すると、思いがけないことに、筆者に「君平」という字（あざな）を下さった。その場で

は、「君平」の典故をお聞きすることができず、先生の意図は知ることができなかったが、筆者は『大学』の「修身、齐家、治国、平天下」から名づけて下さったものと考えている。すなわち、しっかり“修養”し、大成を目指しなさいという意味で把握している。

沙孟海先生から受けた学恩はこうのように測り知れないが、20年前に西泠印社の編輯者から依頼され執筆した「我的留学体会」（『西泠芸叢』8，1983年12月発行）という一文に、筆者の当時の考え方を集約したので、これも再録しておきたい。その冒頭に、

来中国浙江美术学院学习已经一年多了，在沙孟海等老师的指导下，有不少收获。我想从一个留学生的角度来谈谈自己的几个体会：第一是学习同书法有关的学问；第二是重视传统；第三是书法与修养。

（中国の浙江美术学院での学習もすでに一年余が経過し、沙孟海先生等の指導教授のご指導の下、多くの収穫があった。私は一留学生の視点から、自分の幾つかの体験を語ってみたい。一つ目は、書法に関係する学問を学ぶということである。二つ目は、伝統を重視するということである。三つ目は、書法と修養についてである。）

と書き、結びに

以上体会可能很不深刻，但对我却非常珍贵。我学习上的进步，渗透了中国老师的心血。从留学生活中得到的一切，我将永远珍藏在心头。以后，我将为中日两国人民的友谊和文化交流贡献一切力量。

（以上の体験はきっと浅いものであろうが、私にとっては非常に貴重な体験である。私の勉強面での向上は、中国の先生の心血が注がれている。私が留学生活で得たすべてのものは、きっと永遠に脳裏に大切にしまわれることであろう。以後、私は日中两国人民の友好と文化交流のために、あらゆる努力をしていきたいと考えている。）

と述べた。この思いは、帰国後から現在に至るまでずっと変わらず、私の信念となっている。

1992年10月10日に沙孟海先生がお亡くなりになったとの訃報に接し（注7）、先生を追悼して詩一首「敬悼沙孟海先生」を捧げた。

寒風聞訃不堪悲	寒風 訃を聞き 悲しみに堪えず
欲報師恩未有為	師恩に報いんと欲するも 未だ為す有らず
当代盛名埋硯海	当代の盛名 硯海に埋もれ
西泠翰墨有誰支	西泠の翰墨 誰の支うるにか有らん

あの世で沙孟海先生は、きっと下手な詩作だから、きつともっと勉強しなさいと言われるに違いない。

これから、多くの学恩に少しでも報いるために、より一層、一步一步着実に、恩師の後を追いかけて行きたいと思う。

〈補記〉本稿は、《西泠印社——百年名社・千年印学国際印学研討会》に応ずるため、先に中国語で執筆し寄稿した。そのためこの日本語版は、基本的に中国語版と同一内容であるが、原文が漢文の箇所は訓読を付し、中国語の箇所は日本語訳を補い、併せて若干加筆訂正したことをお断りしておく。なお中国語の論文は、『百年名社・千年印学国際印学研討会論文集』p.395～p.400（西泠印社発行2003年11月）に収録。

（注1）「80周年」の時には、記念大会に参加し、見聞した内容を「西泠印社八十周年記念大会印象記」として、北川博邦主幹『篆刻』4号（東京堂出版、1984年1月発行）に報告した。

（注2）「90周年」の時には、「西泠印社九十周年学术交流會論文」として、「日本の短期大学書法教育講座現況」と題する論文を執筆し、日本の短期大学における書道教育の実態を報告した。

（注3）「日本雪心会書法展覧」は浙江省博物館文瀾閣において1988年11月6日から11日まで開催された。沙孟海先生筆「日本雪心会書法展覧」の看板が立てられ、その書の迫力に見入ったことが鮮明に思い出される。同展については、「日本雪心会書法展覧」と題して今井凌雪主幹『新書鑑』1989年1月号に報告文を記述した（池田利広と共著）。

（注4）1983年3月に浙江省紹興市で「王羲之撰写蘭亭集序一千六百三十周年」を記念した学術討論会が開催された。その折、沙孟海先生は「略論兩晋南北朝隋代的書法」を発表された。授業は発表原稿をもとに行われたので、河内は『新書鑑』1983年11月号にその全文を訳出した。なお発表論文は、『沙孟海論書叢稿』上海書画出版社1987年3月発行に収録されている。

（注5）《芸苑掇英》第十八期は、浙江省博物館蔵品の特集号である。また全く同じ体裁、内容の書籍に、沙孟海先生題字による《浙江省博物館蔵品選》がある。

（注6）沙孟海先生のこの文章は《沙孟海論書文集》上海書画出版社1997年発行にも再録されている。

（注7）河内「沙孟海先生追悼文—欲報師恩未有為」（『新書鑑』1992年12月号所収）。

（2003年9月22日受理）

玄支子常此玄玄論
 書曰居以道獨者宗
 如潭深不陸地度便
 之流漸之稱示軍
 書惟二洞為玄勢道獨
 通人之度禱示筆意
 佛度凡人本深不遂輒
 玄為教其多教也然此
 觀之書自以通獨而玄為
 斷然之今舉已難況乎
 通擅為道多學玄自自
 養量勢授于五世位極當
 得二取弱儒者非貴也今
 道家著者惟漸前為鍾太
 傳度為鍾紅雪住置文
 自立其間凡太傳而第松雪定
 不煙浦

書曰居以道獨者宗
 以俱滿者視其玄玄
 玄玄今傳道者惟前為鍾太
 傳度為鍾紅雪住置文
 自立其間凡太傳而第松雪定
 不煙浦

黃夫子嘗與先生論
書曰臣以道媚者宗
加渾深不墜姚廣後
以上流漸久稱右軍
書惟云洞藏筆勢道媚
逼人而虞褚亦筆意

图 2

佛法凡入本姿不逢難抵
黃為軟美少難也以此
觀之書法自以道媚而字為
斷然又今舉已難況乎
道擅善道才學主相自
姿姿姿授于天世位越步
得之取霸傑者非貴也今
道第著者權衡前為鍾太

图 3

傳後為楚松雪位置文字
角正其間見太傅而第松雪定
不誣爾
黃石齋主印元日詩墨迹寫
似似滿寶者倪氏子孫珍藏三
年今歸浙江省博館館員馮
寶子會鼎子跋遂錄其言論
河內利治同啓
沙面馬年高
琴不微夏

图 4